教えてドクター！

B型肝炎は無症状でも油断せず 感染の有無を確かめて

肝臓はアルコールや毒物を分解・排せつするなど、私たちが生きてゆくために欠かせない働きをしています。その肝臓をむしばむ病気の一つが、B型肝炎。でも「どんな病気なの？」と思う人も多いのでは。瀬古内科クリニック院長の瀬古修二先生に、B型肝炎について聞きました

瀬古内科クリニック
院長　瀬古修二先生

昭和62年、京都大学大学院医学研究科修了。医学博士。大津赤十字病院（検査部長）勤務を経て、平成17年大津市膳所にて内科・消化器科医院開業。日本肝臓学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会指導医、日本内科学会認定総合内科専門医

多様な経過をたどるB型肝炎 慢性肝炎や肝硬変、肝がんになる可能性も

肝臓の病気でよくみられるのは、肝機能の異常が慢性化している「慢性肝炎」。これを放置すると肝硬変や肝がんに進行する可能性があります。

慢性肝炎の一番の原因は肝炎ウイルスで、代表的なものがB型肝炎ウイルス（HBV）とC型肝炎ウイルス（HCV）。これらが肝臓の細胞内で増殖し、炎症を起こすと肝炎になるのです。

HBVは血液や体液を介して感染します。B型肝炎の感染経路は、ほとんどが出産時に母親から子どもに感染する「母子感染」。その場合、多くの方が持続性の感染状態となり、一部の方が慢性肝炎に。ただ、母子感染は1986年以降、国の感染防止対策により減少しています。

そのほか、成人が性交渉や針刺し事故などでHBVに感染すると急性肝炎を発症。この場合は2～3週間の入院でほぼ治癒しますが、一部が慢性肝炎になることが報告されています。B型肝炎は進行が多様で、慢性肝炎から肝硬変を経ずに肝がんになる場合もあるなどさまざまな経過をたどるので注意が必要です。

罹患者数は150万人弱 飲み薬の抗ウイルス剤も

現在、日本のB型肝炎ウイルスの罹患（りかん）者（キャリア）数は推定150万人弱といわれています。その中には、ウイルスを保持していても肝機能は正常で、感染していると気付かない人（無症候性キャリア）もいます。そんな人でも、急に調子が悪くなり、調べたら肝がんになっていたということもあるのがB型肝炎の怖いところ。まずは最寄りの医療機関でウイルス検査を受け、感染の有無を調べてもらうことが大事です。もし無症候性キャリアと分かった場合は、定期的に血液検査や腹部超音波検査などを受けましょう。

慢性肝炎とわかったときの治療法ですが、以前はインターフェロンの注射や肝炎を改善する点滴だけでした。インターフェロンは有効な薬ですが、発熱などの副作用があります。しかし近年、副作用の少ない飲み薬の抗ウイルス剤が開発されました。どちらの治療法もウイルスの増殖を抑制し、肝硬変や肝がんへの進行を抑えることができます。治療法の選択はその人の年齢や症状などで変わるので、医師と相談してください。

肝臓は「沈黙の臓器」といわれ、症状が出るのは重症化してから。健康診断で肝機能に異常があったり家族にキャリアがいる人などは、自覚症状がなくても検査することをおすすめします。

脂ののった天然の真鴨　し汁で、うどん（鴨なん　甘い歌声と端正なマス　分～の部は2階席です。